

『アンナ・カレニナ』のスポーツ描写の諸相

岩本和久

はじめに

ロシア文学において積極的にスポーツを取り上げた散文作家としては、アレクサンドル・クプリーン、ヴラジーミル・ナボコフ、ユーリイ・オレーシャ、レフ・カッシーリ、ユーリイ・ナギービン、ユーリイ・トリフォノフらの名を挙げることができる。¹ その先駆者とも言えるのが、レフ・トルストイだ。²

貴族の技芸や農民の気晴らしだったスポーツは、19世紀後半以降、ルールの整備や国際試合の展開など、近代スポーツとしての体裁を整えていく。トルストイが活躍したのはそのような時代だったが、文豪自身もスポーツを好んでいた。

トルストイは乗馬を好んでおり、乗馬姿の写真が多く残されている。また、67歳という高齢になってから自転車の運転にも挑戦しており、モスクワのトルストイ博物館にはその自転車が展示されている。

『トルストイ事典』には「スポーツ」という項目が立てられているが、その記述によれば、少年時代から体操に親しんでいたトルストイは書齋にダンベルを置き、息子たちにも体操を行わせていた。水泳やテニスには家族で取り組み、1890年代後半にはヤースナヤ・ポリャーナの邸内にテニスコートを作ってしまった。³

本稿ではトルストイの作品のうち、特にスポーツ描写が目立っている『アンナ・カレニナ』に注目し、そこに提示されたスポーツの諸相、あるいはスポーツ観、さらには小説の中でスポーツ描写が果たしている役割を明らかにしたい。

1. 頑強な身体

『トルストイ事典』の記述にあるように、トルストイはダンベルで体を鍛えていた。

トルストイがスポーツを好んだのは、健康で頑強な身体を彼が好んだからだろう。強い

¹ ソ連期のスポーツ文学については、*Абрамов С. Не только цифры // Правда. 17. 03. 1983. № 76 (23602). С. 6* を参照。

² たとえば、ナボコフの長編小説『ブニン』では、ロシア文学で最初にボクシングを描写したのがレールモントフ『商人カラーシニコフの歌』であり、最初にテニスに言及したのがトルストイ『アンナ・カレニナ』だという指摘がなされている。

³ *Шестакова Е.Г. Спорт // Л. Н. Толстой. Энциклопедия. / сост. Н.И. Бурнашевой. М., 2009. С. 409-410.*

身体は民衆の生活に欠かせぬものでもあった。ルソーの影響のもと、プリミティヴな生活をトルストイが評価していたことは言うまでもないが、そのような彼の人間観は次の文章からもうかがうことができる。

鳥は飛んだり、歩いたり、啄んだり、考えたりせねばならぬようにできていて、これら全てのことをする時、鳥は満足し、幸福なのであり、その時、鳥は鳥なのである。人間もまったく同じなのだ。人間は歩いたり、転がしたり、持ち上げたり、引きずったり、指や目や耳や口や脳を使って働いたりする時、その時、初めて満足できるのであり、その時、初めて人間は人間なのだ。⁴

トルストイの考えでは、人間とは本来、頭脳だけでなく身体を使って働くものなのだ。ゲイリー・モーションによれば、トルストイは身体が精神に影響すると考えてもいた。思考や感情は身体とは別に存在するのではなく、身体が思考や感情を規定するのだ。

トルストイの同時代人たちが指摘していることだが、身体が精神をいかに形成するかをトルストイだけが理解していたのである。トルストイにおいては、思考と感覚は先行する思考と感覚によって、あるいは内的外的な出来事への反応によって生起するだけでなく、身体の姿勢によっても生起するものなのである。彼の時代のある批評家の観察によれば、祈りたくなった結果、跪く姿勢を取ると誰もが思っていたというのに、トルストイ伯爵は、たまたま跪いた結果、祈りたくなる、と理解していたのだ。身体はそれ自身の精神を持っているのである。それは我々の意志や感情を反映するだけでなく、精神と同様にそれ自体の内的なダイナミズムを表現するのだ。仕種が心理プロセスの反映であると考えるのは間違いなのだ。トルストイを読む時に我々が気づくのは、身体運動がなければ、我々の感覚と思考はまったく別のものだったろう、ということだ。⁵

トルストイが行っていたような心身の鍛錬を『アンナ・カレニナ』において行うのは、作家の分身とも言うべきレーヴィンである。長々と語られることのない細部だが、彼はダンベルで体を鍛え(第1篇26章)、ヴェスローフスキイと共に平行棒で体操を行うのだ(第6篇14章)。

⁴ Толстой Л.Н. Так что же нам делать? // Полное собрание сочинений. Т. 25. М., 1937. С. 390.

⁵ Gary Saul Morson, *Anna Karenina in Our Time: Seeing More Wisely* (New Haven: Yale University Press, 2007), pp. 10-11. また以下の論文も参照。E. Lampert, "The Body and Pressure of Time" in Malcolm Jones ed., *New Essays on Tolstoy* (Cambridge-New York: Cambridge University Press, 1978), pp. 131-148.

2. 流動する世界

トルストイとスポーツの関わりについては、別の背景を指摘することもできる。トルストイはそもそも、運動に惹きつけられていたのだ。彼にとっては絶えざる運動こそが、生命の本質だったのである。

たとえば、彼は「生とは中断することのない運動」であるとする。

生とは中断することのない運動であるが、世界との関係を変えずにしながらも、つまり、この生の世界に入った時と同じ愛の段階にとどまりながらも、生の停止を感じる時、彼は死を見ることになるのである。⁶

よく知られた『戦争と平和』（1865-1869）のピエールの夢もまた、世界の流動性、「生の運動」を語ったものだ。

「生が全てだ。生は神だ。全ては移動し、運動するが、この運動が神なのだ。生がある間は神性を意識し至福に浸れる。生を愛し、神を愛すべきだ。何よりも難しく悦ばしいのは、自らの苦難において、いわれなき苦難において、この生を愛することだ」

「カラターエフ！」ピエールは思い出した。

そして突然、スイスでピエールに地理を教えていた、ずっと忘れていた小柄な老教師の姿が、まるで生きていたかのようにピエールの脳裏に現れたのだった。「待ちたまえ」と老人は言った。そして、彼はピエールに地球儀を見せた。この地球儀は生きた、揺れ動く球体で、大きさも定まっていなかった。球体の表面全体は、隙間なく集まった水滴から出来ていた。そして、これらの水滴は常に動き、位置を変え、数滴が集まって一滴になったり、一滴がいくつもの水滴に分かれたりしていた。それぞれの水滴は膨れて、できるだけ広い空間を占めようとするのだが、他の水滴がその水滴の方に広がり、圧迫し、時々、潰れてしまったり、融け合ったりするのだった。

「これが生だ」老教師は言った。⁷

ジョン・ベイリーによれば、トルストイの作品の構成も、この「運動」という原理にもとづいている。

トルストイは固定した視点ではない。彼はたえず運動をつづけ、私たちと一緒に運んでゆく。

⁶ Толстой Л.Н. О жизни // Полное собрание сочинений. Т. 26. М., 1936. С. 409.

⁷ Толстой Л.Н. Война и мир // Полное собрание сочинений. Т. 12. М.-Л., 1933. С. 158.

彼は事物そのものに歓びを覚え、それをふんだんに記録してゆくが、それはちょうど汽車に乗って窓外に過ぎるものは何一つ見逃すまいとしている男のようである。彼は自分の言語感覚よりも強い力によって、先へ先へと運ばれてゆく。モスクワからペテルブルグに向かうアンナや、シベリアの旅に出かけるネフリュードフの場合のように、トルストイの描く汽車の旅はつねに記憶に残るものだ。彼の細部の知覚はすべて、この着実な前進運動にたよっているのだから、この運動は彼の長い生涯を通じて決して停止することはなかった。⁸

『アンナ・カレーニナ』でレーヴィンとキティがスケートに興じる場面でもまた、世界の絶え間ない動き、世界の流動性が強調されている（第1篇9章）。

スケート場では雑多な人々が集まり、キティの周囲をばらばらに動き続ける。

そこには自分の技倆を誇示するスケートの名人もいれば、椅子につかまっておずおずと不器用に体を動かしている初心者もおり、子供もいれば、健康のためにすべっている老人もいた。レーヴィンの目にはだれもがえりぬきの果報者のようにうつった。なぜなら彼らはそこに、彼女の近くにいたからである。すべっている者たちは、みんな世にも無関心な顔つきで彼女に追いついたり、追い越したりし、話しかけたりさえていた。そしてすばらしい氷と快晴の天気を楽しみながら、彼女とはまったく無関係に浮かれているようであった。⁹

うごめく人々の中をキティが滑り出すと、そのとりとめのない流れの中にキティの身振りが加わることになる。キティが「まっすぐにシチェルバーツキイのところまですべって」くると、それらの動きは後景に退き、後にはキティの美しさだけが残る。

彼女はすみの方にいたが、ふかい編上靴をはいたほっそりした両足をそっと踏み出すと、見るからにおずおずと彼の方にすべってきた。ロシアふうの服装をした男の子が一人、やけに両手を振って身をかがめながら、彼女を追い越していった。彼女のすべり方はさしてしっかりしたものではなかった。万一にそなえて両手を紐につるした小さなマフから出したままにしながら、彼女はいましたがそれとみとめたレーヴィンの方を見てほほえんだが、そのほほえみは自分の臆病さに向けられたものでもあった。旋回がおわると、片足を軽快にひと蹴り蹴って、まっすぐにシチェルバーツキイのところまですべってきた。そして片手で彼につかまって、微笑しながらレーヴィンに会釈をした。彼女は彼が想像していたより美しかった。¹⁰

⁸ ジョン・ベイリー（海老根宏訳）『トルストイと小説』研究社出版、1973年、125-126頁。

⁹ トルストイ「アンナ・カレーニナ I」（木村彰一訳）『世界文学全集 37 トルストイ集（四）』筑摩書房、1970年、34頁。

¹⁰ トルストイ「アンナ・カレーニナ I」、35頁。

世界の流動性というトルストイの認識がもっとも鮮明に表れる場のひとつが、スポーツ体験であったと言えるだろう。

3. 社交

貴族社会において、スポーツは社交の場でもあった。『アンナ・カレニナ』にはそのような舞台が多数含まれている。

ヴロンスキイが出場する競馬には、「上流社交界の人々がすべて」観客として集まる（第2篇28章）。アンナはトヴェルスコーイ公爵夫人にクロケットに誘われるが、これも社交としての性格が強い（第3篇17章）。クロケット場はアンナが、ヴロンスキイやドリイ、ヴェスローフスキイらとテニスに興じる場としても用いられる（第6篇22章）。変わり者のレーヴィンでさえ、オブロンスキイやヴェスローフスキイと狩猟を楽しむ（第6篇10章）。

社交の場は一方で、孤独な者が集団と対峙する舞台でもある。

アンナとヴロンスキイは、アンナが2人の子を妊娠しているという事実を人々から隠して、競馬場に向かう。その後、ヴロンスキイが落馬したことを機に、アンナは夫といさかいを起こし、夫との関係を決定的に破壊する行為、すなわちヴロンスキイとの不倫の事実を告白してしまう。アンナと社会をつなぐ場であったはずのスポーツ観戦が、社会とのつながりを断つ役割を果たしてしまうのだ。

クロケットの集まりに赴いた際もアンナはその場の「軽さ」に耐えかねて、クロケットを行わないまま帰宅してしまう（第3篇18章）。一方で、家庭的なドリイは、アンナがテニスというスポーツ文化に馴染むことができない。

プレーが行なわれているあいだ、ドリイは楽しい気がしなかった。彼女には、そこでもつづけられているヴェスローフスキイとアンナとのほしたない態度や、子供がいないのに大人たちだけが子供じみた遊びをするということ自体の不自然さが気に入らなかった。¹¹

スポーツでは社会的な集団と個人が対立する。近代スポーツや国際競技が発展する中で、スポーツは集団的に組織化され、さらには国民を統合する役割さえ果たすようになったが、競技の行方が最終的には個々のプレイヤーの動きに委ねられていることは間違いない。またスポーツ文化を理解せず、それを子供の遊びとみなす市民もいる。そのような事態を、

¹¹ トルストイ「アンナ・カレニナII」（木村彰一訳）『世界文学全集38 トルストイ集（五）』筑摩書房、1970年、221頁。

トルストイは早くも見抜いていたのである。

4. 勝敗

スポーツは勝敗を伴い、プレイヤーは勝利に満足感や喜びを、敗北に羨望や絶望感を覚える。狩猟に出たレーヴィンは、オブロンスキイやヴェスローフスキイよりも多くの鳥を撃ち落とし、そのことで素朴な喜びを得る（第6篇13章）。

運命的な敗北を体現するのは、ヴロンスキイだ。

愛馬フルー・フルーと共に競馬に参加したヴロンスキイは、しかし、意識せずに行った強引な動きで馬の背を痛めてしまう。もはや馬は走ることができず、ヴロンスキイは自らの過失と敗北を受け入れるしかない。

負傷した馬は射殺されることになる。語り手はこの結果を、ヴロンスキイにとっての人生最大の不幸とする。

彼は自分を不幸だと感じた。それは彼が生まれてはじめて味わったたえがたいほどつらい不幸、みずからひき起こしたとりかえしのつかない不幸であった。¹²

『アンナ・カレーニナ』における競馬の場面は、競技スポーツのロマンティックな理解を鮮明に伝えている。スポーツは人生を賭けて行われるゲームであり、しばしば死を伴うことになる。『アンナ・カレーニナ』の場合、ヴロンスキイが命を失うことはないが、代わりにフルー・フルーがあな世に送られる。

生死の境を追求するロマンティックな振る舞いを、ヴロンスキイは後になっても反復する。小説の結末で彼は、志願兵として露土戦争に参加するのだ。

一方で、『アンナ・カレーニナ』には、こうした運命的な挑戦を批判するかのときエピソードも含まれている。

フルー・フルーを失ったことは、ヴロンスキイの人生の終わりを意味しはしない。彼はその後も競馬を続け、新しい愛馬のアトラス号で優勝する（第7篇7章）。競馬に似ていると、県貴族会の選挙に熱中したりもする（第6篇30章）。

「まるで競馬だね。賭けでもやりたくなるね」

「ああ、いかれちゃいそうだよ」ヴロンスキイが言った。¹³

¹² トルストイ「アンナ・カレーニナ I」, 223 頁。

¹³ トルストイ「アンナ・カレーニナ II」, 248 頁。

ヴロンスキイはまた、奇妙な外国の王子の接待をすることになる。この王子は世界各国で快樂を極めるために自らの身体を鍛えているのだが、ヴロンスキイは王子のことを、自らの不愉快な分身として意識してしまう（第4篇1章）。

皇太子は皇族の中でもたぐいまれな健康の持主であった。体操と行き届いた健康法とによって、並々なぬ体力をたくわえていたので、過度の歡樂にふけていたにもかかわらず、青々としてつやのいい、大きなオランダ胡瓜のように新鮮であった。[中略] 皇太子がヴロンスキイにとって特に耐え難く思われた第一の理由は、彼が皇太子のうちに心ならずも自分自身の姿をみとめたからであった。しかもその鏡の中に彼のみとめたものは、彼の自尊心を喜ばせるものではなかった。それは非常に愚かな、非常にうぬぼれのつよい、非常に健康な、非常に身だしなみのいい男であったが、しかしそれ以上の何者でもなかった。¹⁴

愛憎をはらんだアンナとヴロンスキイのコミュニケーションもまた、勝敗の性質を帯び始める。自分を放置していたとヴロンスキイを責めることでアンナは彼に「勝利」したと思ひ込むが、一方で「勝利」したアンナを彼が許そうとしないこと、よりいっそう冷淡になることを知る。ここで「勝利の喜び」(торжество победы)を隠そうとしたアンナが、ヴロンスキイに競馬の話を始めさせようとするのは皮肉だ（第7篇12章）。

「競馬はどうでしたの？まだお話を伺っていませんわ」ともかくも自分のものとなった勝利の喜びを隠そうとつとめながら、彼女は言った。

彼は夜食の注文をして、競馬の模様をこと細かに話しはじめた。けれども、しだいに冷やかになってゆく口調と眼差の中に、ヴロンスキイが彼女の勝利を許していないこと、彼女の闘った強情さがまたも彼の中に根をはって来たことに、彼女は気づいた。¹⁵

自殺する直前にアンナが考えるのも、勝敗の感情である。自らに対するヴロンスキイの愛は「虚栄心の満足を誇る気持ち」(торжество тщеславного успеха)、すなわち勝者の喜びでしかない、とアンナは思う（第7篇30章）。

ヴロンスキイに対する勝利をアンナが確信する上の引用でも、ヴロンスキイの中に勝者の喜びを見出す下の引用でも、同じ торжество という単語が用いられていることは注意を要するだろう。恋愛の駆け引きの目的は二人が結ばれることそれ自体ではなく、勝敗の喜びへと転化してしまっているのだ。

¹⁴ トルストイ「アンナ・カレニナ I」, 392-393 頁。

¹⁵ トルストイ「アンナ・カレニナ II」, 297 頁。

そうだ、あの人の中にあっただのは、虚栄心の満足を誇る気持だ。もちろん、愛情もあるにはあったが、大部分が成功を誇る気持だったのだ。あの人は私を誇りにしていた。今はそれも過ぎてしまった。誇るものは何もない。誇れないどころではなくて、恥じなければならぬ。¹⁶

一方で、キティがアンナに投げかけた憐れみの眼差しを、アンナは忘れることができない。ヴロンスキイの勝利を共有できず、またキティに対しても勝利することのできないアンナは、出口を見失ってしまうのだ。

まとめ

『アンナ・カレーニナ』はスポーツの場면을多く含んでいるが、それらを通して、スポーツや身体運動を作家が多面的に理解していたことがわかる。身体の強化、世界の流動性、社交と疎外、勝敗の悲喜という4つの側面を本稿では指摘した。

それらは小説の細部に過ぎないようでありながら、実のところ、リョーヴィンの質実な生活、あるいはアンナとヴロンスキイの間の心理的駆け引きなど、小説全体の構造を支えている。『アンナ・カレーニナ』のスポーツ描写は、当時のロシア社会におけるスポーツの発展を反映しているだけではない。生命と死、運命、社会と個人の対立といったこの作品の主題はスポーツの特質と親和性に強いものだったのだ。スポーツ描写を作家が積極的に取り込んだのも、そのためであろう。

¹⁶ トルストイ「アンナ・カレーニナⅡ」, 337-338頁。